

# 第45回 中国地区英語教育学会 島根大会プログラム



**【期日】平成26年（2014年）**

**6月21日（土）**

**【会場】島根大学 松江キャンパス**

主催：中国地区英語教育学会      共催：島根大学  
後援：島根県教育委員会   鳥取県教育委員会  
松江市教育委員会   島根県中学校英語教育研究会  
島根県高等学校英語教育研究会   松江工業高等専門学校



# 目次

---

## ご挨拶

- 「ともに語り合い、ともに前進するために」…………… ii  
大会実行委員長 飯島 睦美

## 全体日程、会場・交通案内…………… iii

## 教室配置図、お知らせとお願い…………… iv

## パネルディスカッション…………… 1

- ・「英語教育の本当の『危機』とは」 柳瀬 陽介…………… 2

- ・「英語教育の担い手にとっての危機  
—教育は人なり—」 檜葉 みつ子…………… 7

- ・「“英語教育の危機”に教育現場でできること  
—子どもに身体性を取り戻す—」 山本 玲子…………… 8

- ・「『英語教育の危機』は教室にあり」 卯城 祐司…………… 12

## 自由研究発表および講話・ワークショップ…………… 14

### ○講話・ワークショップ 3件 (14:50~15:55)

- ・「ICT、英語の授業でどう使う？  
—授業改善のための ICT 活用事例—」 渡部 正嗣
- ・「どの子にも存在感があり自尊感情の高まる授業を目指して  
—協調的問題解決と特別支援教育の視点から—」 宇城 明
- ・「そうだったのか！ ひろしま型カリキュラムと小学校英語科  
—創設の経緯から研修の実際まで—」 堂鼻 康晴

### ○自由研究発表 23件 (15:25~17:05)

## ともに語り合い、ともに前進するために

大会実行委員長 飯島 睦美

みなさま、ようこそ島根県大会へおでかけいただきました。

政府の掲げる『未来への飛躍を実現するグローバル人材の養成』の指標のもと、海外で活躍するグローバル人材を養成するために、昨今、小・中・高校での英語教育の充実が強く求められています。文部科学省は、小学校英語を教科化する方向で検討を開始し、平成 26 年度概算要求では、英語教育の強化重点課題に「小・中・高等学校を通じた英語教育強化推進事業」、「スーパーグローバルハイスクール」、「日本人学生の留学支援」などの施策をとっています。どれも目標へ向かっての重要な動きであるといえますが、その一方で様々な観点から「英語教育の危機」が語られることも頻繁にできました。世の中へ向けて語られた言葉は、部分的に一人歩きする場合があります。関わる多くの人々が翻弄されることもあります。教育現場の最前線に身をおく我々は、日本社会のみならず全世界に安定した豊かな将来が約束されるように、そんな時代を作り上げられる子供たち、若者たちを輩出する責任があります。よって、英語教育を取り巻くこういった状況にやみくもに不安を感じたり、短絡的に意見を異にすることなく、きちんと把握、理解したうえで、目の前の児童、生徒、学生たちの指導に積極的に取り組む義務があります。

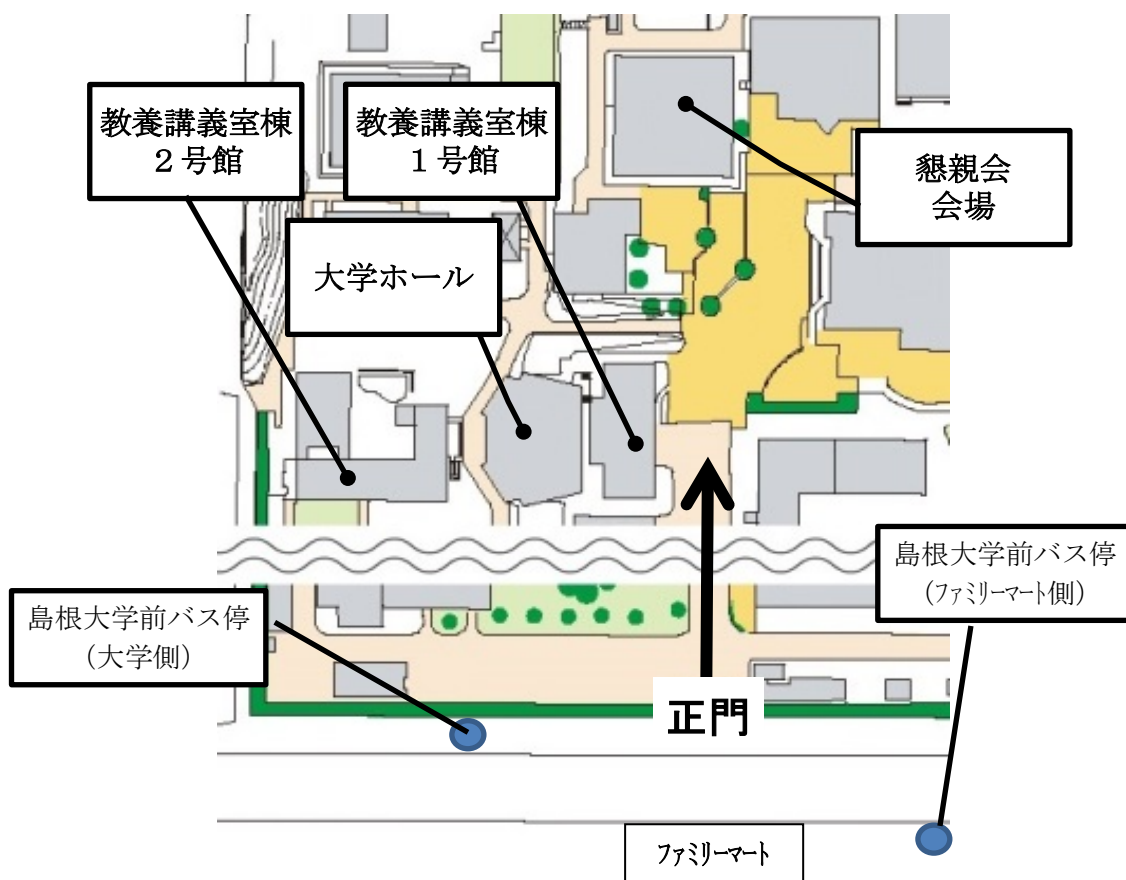
今年の中国地区英語教育学会では、こういった状況を皆さまと共有し、考え、語り、そして明日に向かってさらに充実した英語教育を推進する活力となるような時間を共に過ごすことができると、全国英語教育学会会長である筑波大学卯城祐司教授をお招きし、広島大学柳瀬陽介教授、広島大学榎葉みつ子准教授、大阪国際大学山本玲子准教授にご登壇いただき、パネルディスカッションを開催することとなりました。さらに、各県の顕著な取り組みを紹介するために、講話・ワークショップを計画しました。

アラゴンは言いました。「教える者は夢を語れ。学ぶ者は誠実を胸に刻め。」と。すべての不安や迷いを消し去り、明確なミッションをもって、ともに目の前の学習者に大いに夢を語り、導いていけるように、今日 1 日が皆さまにとって少しでも明日への活力になれば、大会実行委員会一同幸いです。大会運営上、至らぬこともあるかと存じますが、何卒ご容赦いただき、積極的なご意見、ご参加よろしくお願いたします。

## 第45回 中国地区英語教育学会 島根大会 全体日程

- 12:00～ 受付（教養講義室棟 1号館正面入口）  
 12:30～13:00 総会（教養講義室棟 1号館 102番教室）  
 13:10～14:40 パネルディスカッション（大学ホール）  
 テーマ：今日叫ばれる“英語教育の危機”とは？  
 —そのとき教育現場は？—  
 14:50～17:05 自由研究発表・ワークショップ（教養講義室棟 1号館、2号館）

### 会場・交通案内



●松江駅を經由するバスの時刻表（一部）

○島根大学前バス停（大学側のバス停）：「北循環線（外回り）」で松江駅まで約10分

15時台	16時台	17時台	18時台	19時台
15:02	16:12	17:25	18:28	19:02
15:40	16:47	17:53		

○島根大学前バス停（ファミリーマート側のバス停）：

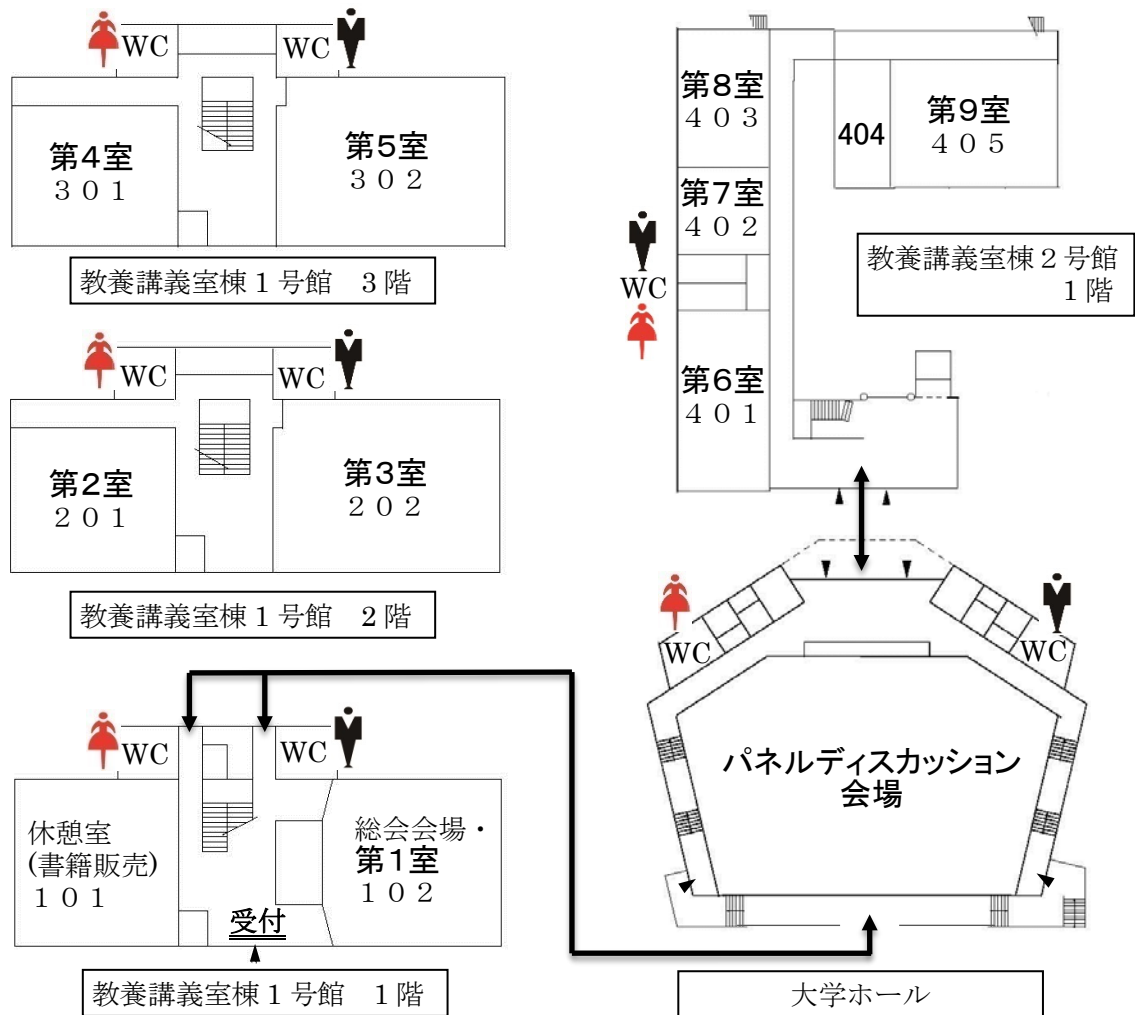
「松江駅・メッセ」、「県合同庁舎」、「神魂神社・かんべの里」で松江駅まで約20分

「北循環線（内回り）」で松江駅まで約30分

\*1時間に4～5本程度（19時台 19:05、19:20、19:50、19:54）

- タクシー：一畑タクシー 0852-21-4334  
 ミツワタクシー 0852-25-3030

## 教室配置図



## お知らせとお願い

すべての参加者の方へ

- 「休憩室」(101)はすべての方にご利用いただけます。
- 「休憩室」(101)では書籍の展示、販売を行っております。よろしければお立ち寄りください。
- 基本的に会場内にはゴミ箱はございません。申し訳ございませんが、ゴミ等はできるだけお持ち帰りください。
- 構内は全面禁煙となっております。喫煙はご遠慮ください。

自由研究発表の発表者の方へ

- 自由研究発表の時間は発表 20 分、質疑応答 10 分です。各室の計時係が 20 分で 1 鈴、30 分で 2 鈴鳴らします。
- 自由研究発表の会場には司会者はおきませんので、質疑応答は発表者で行ってください。
- 自由研究発表の発表資料はご発表の直前に配布してください。万一、資料が不足しても追加の印刷等はいたしませんのでご了承ください。また、ご発表後、資料等はすべてお持ち帰りください。

# パネルディスカッション

13 : 10 ~ 14 : 40

## テーマ

今日叫ばれる“英語教育の危機”とは？  
—そのとき教育現場は？—

コーディネーター： 柳瀬 陽介（広島大学）

パネリスト： 檜葉 みつ子（広島大学）  
（50音順） 柳瀬 陽介（広島大学）  
山本 玲子（大阪国際大学）

指定討論者： 卯城 祐司（筑波大学）

企画者・司会： 飯島 睦美  
（国立明石工業高等専門学校）

# 英語教育の本当の「危機」とは

柳瀬陽介（広島大学）

キーワード：新自由主義, 「からだ」, 「こころ」

## 1. 新自由主義と新保守主義の複合体による熱狂の中で

現代の英語教育界は改革の「嵐」の中にあると言っても過言ではない。これらの改革は、一方で「正論」として声高に語られながら、他方でその提唱者・代弁者が現場の声にほとんど耳を傾けようとしない点で、改革者が何か「取り憑かれている」ものようにも思える。「とにかく国が言うんだからやるしかないんです」と血相を変える関係者の熱狂も、それは何かの憑依の反映なのかもしれない（人が、複数の理性的な選択肢の存在を否定する時、その底流にあるのは本人が自覚しがたい強烈な感情的複合体—コンプレックス—である）。

2013年12月13日文科科学省発表の英語教育改革計画にも見られるように、現在の英語教育改革は、経済・工業・政治の論理に深く影響されている（この点については後日改めて論考をする予定である）。「経済成長が至上命題であり私たちはグローバル競争を勝ち抜かねばならない」、「そのために英語ができる学習者（そして教師）を短期間で計画的・合理的に養成せねばならない」、「国威発揚できる東京オリンピックまでに英語教育改革を完遂する一方、『日本人としてのアイデンティ』を育成しなければならない」、—これらのいわば有無を言わせまいとする立論は、新自由主義的な個人間競争の讃美を表面とし、その競争に疲弊する人々を集团的に束ねる新保守主義的な愛国心を裏面とする（ハーヴェイ 2007）感情的複合体となっていないか。

この感情的複合体は表側で資本主義という制度化された近代的教理により正当化され—英語教育における資本主義的発想の影響については、柳瀬（近刊）を参照されたい—、裏側で国家主義という近代的教条に裏づけられて、意識面での合理性が保証された「正論」として通っている。だが正論であるはずにもかかわらず、それを唱える人々が眼尻を上げ肩を怒らせる様子からは、人々の無意識が抑圧されていることが推測できる。論の正しさからだの底からの深い確信をもつ者はからだを強張らせないからだ。また正論を「仕方ない」として受け入れる教師の抑うつ的な様子からは、無意識が抑圧されその人の生命力が損なわれていることが伺える。

人間は合理的（＝割り切れる）側面と、合理外的（＝割り切れない）側面をもつ生き物であり、社会もその両面をもつ。それにもかかわらず、ある特定の割り切り方（＝合理的教条）が「正論」としてあまりにも権力をもちすぎ、それに対するためらいや批判を一切認めないイデオロギーになってしまうと、それは絶対的な価値を付与されたように感じられ始め、感情的複合体となる。感情的複合体は、人々に憑依し熱狂を産み出すと同時に、その論理では割り切れない人間の側面を抑圧してしまう。

ある国・時代が強烈な感情的複合体に憑依され熱狂が生じることの危険を指摘したのは、無意識がもつ「内なる世界」の重要性を知る深層心理学者として、第一次大戦後から第二次



大戦にいたるドイツの悲劇を隣国スイスで目にしていたユングであった。彼は 1934 年の時点で、「人々は政治や経済の巨大なプログラムという、いつもきまって諸国民を泥沼に引きずり込んできた代物にばかり喜んで耳を傾けています」、と当時の社会の傾向を指摘する。為政者が政治や経済の大事ばかり語り、それにつられて人々が日々の暮らしの小事への気遣いを忘れ始める時、社会は暴走へと近づいてゆく。その上でユングは、「私たちの文化的遺産が天から下ったものなどではなく、私たち一人一人の人間が最終的な作り手なのだということを感じて疑わない少数の人々」に対して語りかける。「大きなところが歪んでくるとしたら、それはなによりも一人一人が、私自身がおかしくなっているからにはほかなりません。それなら何よりもまず、私自身を正すのが理性に適った道でしょう」 —かくしてユングは危機的な状況でこそ「人間のこころというものの永遠不変の事実の上に、自らの基礎を築くしかありません」と述べる（ユング 1996）。大言壮語的な議論が社会で横行する時にこそ、私たちは日々の暮らしの細やかな営みのあり方を大切に、それらがいつのまにか荒廃してしまわないように配慮しなければならない。

熱狂的で頑迷な立論に対して、同じように熱狂的な糾弾や頑迷な反対運動で反逆しても、それは立論のイデオロギー性によりナンセンスと決めつけられ、感情的複合体性により感情的な嵐の中に引き込まれてしまうだけかもしれない。私たちは、感情的複合体となった時代のイデオロギーが抑圧し隠蔽している私たちの無意識的な側面を静かに向き合うことを試み、その静穏に基づき新たな立論を構築するべきではないだろうか。

時代の「正論」に私たちが熱狂する時（あるいはそれを力なく是認する時）、私たちはその理屈で私たちが抑圧している無意識からのメッセージに耳を傾けるべきだ。無意識からのメッセージは「こころ」のざわめきや「からだ」の違和感といった形をしばしば取る。私たちはその違和感を言語化するべきだろう。私たちがそのメッセージを無視しつづければ、「正しい理屈」に憑依した熱狂は、暴走と破滅に至りかねないというのは、歴史上さまざまな個人や社会の歴史が語ることだ。

## 2. 抑圧された「からだ」と「こころ」からのメッセージに耳を傾ける

それでは、学校において、英語という教科指導を第一責務としながら、子どもの成長支援という社会的役割を担う英語教師は、この状況において、何をし、何をすべきでないのか—私は今回敢えて「学習者」という呼称を避け、まだ「大人」でないがゆえに配慮を必要とする「子ども」という呼び方をする—。

ユングの見立てにしたがえば、私たち英語教師は、まず自らの歪みを正し、人間の「こころ」にまっすぐ向き合わなければならない。強行される改革への直接抗議が不要だということではない。だが、それ以上に、私たちは、命令体系の末端で Yes か No を言うだけの存在としてではなく、自ら息づく「こころ」と「からだ」をもった一人の人間として、現場で感じる実感を基に、子どもの「こころ」と「からだ」に向き合うべきだろう。

経済と工業の論理で補強された政治の論理に Yes か No を言うというだけのコミュニケーションでは、結局は現状の制度的権力を有する政治の論理に絡め取られてしまう。英語教師は、経済・工業・政治の論理に基づくコミュニケーションよりも、教育の論理によるコミュニケーションを始めるべきではないか。若き生命を育むという教育の論理を、経済・工業・

政治の論理に絡め取られてしまった人々に提示して理解と共感を得ながら、教育の論理に基づく営みを正々堂々と学校で行うべきだろう。教育に政治の力が必要だとしても、それは教育の論理を私たちが教師としての営みで明らかにして、教育の営みがどのようなものであるかを市井の人々に行動と言説で広く知らせてから、政治的な力の獲得に向かうべきではないのか。英語教師は、政治のゲームに深入りする前に、まずは自らの「からだ」と「こころ」の実感、そして子どもの「からだ」と「こころ」の様子を世間に伝えるべきではないのか。

英語教師として日々子どもに向き合う私たちの「こころ」は、何を感じているだろうか。私たちの「からだ」は何を伝えようとしているだろうか。そして、何よりも子どもの「こころ」は何を感じているのだろうか。それを知るためには、十分に「こころ」の表現を成し得ない子どもの「からだ」の表情・動きを共感的に理解する必要があるだろう。

ここでごく簡単にでも「こころ」と「からだ」の定義をしておくべきだろう。ここでいう「こころ」とは、無意識的な「からだ」が生み出す情動 (emotion) — 身体の生理学的・生化学的反応 — が、感知され自覚された上で生じる感情 (feeling) の意識を基本的に意味している。私たちのいわゆる「知的」 (intelligent) な認知活動 — 思考や言語使用 — はすべて、「からだ」の情動に起因する「こころ」の感情の意識を基盤としている (Damasio 2010)。

この定義に基づいて言い直すなら、英語教師の重要課題とは、子どもから英語や日本語の発話を要求する以前に、子どもの「こころ」の中で感じられているはずの感情を感知することである。子どもの、いわばことば以前のメッセージである「こころ」の感情を教師が的確に感知しないままに、英語にせよ日本語にせよ子どもに発話を強要するなら、子どもは予め定められた「正解」を自らの実感とは無縁に口にするか、そのような一種の儀式に意義を見いだせず口を閉ざすだけだろう。教師が、ことば以前の子どもの「こころ」の感情を感知するためには、子どもの「からだ」が自由に情動を生み出せるように、子どもの存在が — 子どもが有しているかもしれない種々の問題にもかかわらず — 肯定的に受容されていなければならない。存在を肯定された子どもは、身体内に多様な情動を生み出し、それは子どもの「こころ」の中では豊かな感情として立ち現れ、身体外でも微細な表情、時には大きな動きを生み出す。子どもはその感情に促されて、思考や言語使用へと向かう。周りの人はその子どもの表情や動きに促されて、その子どもの思考や言語使用を支援しようとする。

逆に言うなら、子どもから内発する情動と感情を否定・無視して、子どもを外から支配し操作しようとしても、その効力は一時的なものに過ぎず (Dewey 1916)、そこで「学習」されたはずの行動は、子どもの「身につかない」。「心ここにあらず」だったからである。だが教師は、時に子どもをいかに支配し操作するかという発想に取り憑かれてしまっている — それはそもそも教師自身が、自らの情動と感情を否定され、外側から支配し操作されてしまっているからかもしれない —。

外からは観察しがたい情動と感情という「内なる世界」が、子どもにおいても教師においても守られなければならない。次世代の「内なる世界」が、新自由主義と新保守主義によって強化されたグローバル資本主義社会という「外なる世界」に塗りつぶされてしまうなら、それは社会の未来の可能性を損なうことではないのか。英語教育改革を無視することも全面否定することもできない。だがグローバル資本主義的な憑依的熱狂に現場教師もが取り憑かれてしまい、子どもと教師自身の「からだ」と「こころ」を置き去りにしてしまうなら、そ

れこそが英語教育の「危機」ではないのか。

英語教育の本当の危機とは、近代社会が必要とする資本主義と国家に基づくがゆえに全面否定できない新自由主義と新保守主義が英語教育に侵入していることであることではなく、その侵入に煽られて、教師が本来の使命である子どもの「からだ」と「こころ」に配慮することを忘れてしまうこと、そして、自らの「からだ」と「こころ」のあり方にも気を配らなくなることはないか（外的に来襲した危機が、致命的になるのは、それが私たちの内面を蝕んだ時である）。

グローバル資本主義を一掃することなど誰もできないし、誰も望むべきではないだろう—それが 20 世紀の壮大な社会実験で私たちが学んだことかもしれない—。だが、グローバル資本主義が私たちの、そして子どもの「からだ」と「こころ」の自然を一掃してしまうことは避けなければならぬ。教師は、子どもと自分の「からだ」と「こころ」を守ることを本務としなければならないのではないのか。

### 3. 現状で何ができるのか？

しかし、現実はどうか。英語教師は、子どもが活着しているということを、数値（例えば、観点別評価の評定、標準テストの得点、Can-Do List の達成状況など）にひたすらに還元することを強いられていないか。また教育行政者・教師教育者も、教師が活着しているということを数値（例えば、子どもが獲得したテスト得点、教師自身の Can-Do List の達成状況など）だけで管理しようとしていないか。子ども、そして教師の、数値に還元しがたい「こころ」と「からだ」—「内なる世界」— のメッセージは無視されていないか。それどころか「こころ」と「からだ」のメッセージは、数値目標達成の邪魔になる「問題」あるいはせいぜい「ノイズ」としてしか認識されていないだろうか。子どもや教師のためではない、管理のための管理ばかりが横行していないだろうか。まじめな現場教師ほど、国策の「正論」と現場の実態の乖離と矛盾を感じながら、板挟みになったまま、自分の「こころ」と「からだ」を苦しめているのではないだろうか。

それでは英語教育学という学術的言説権力は、抑圧されがちな教師そして子どもを守り、彼・彼女らに力を与えるために行使されているだろうか。ここでも楽観視はできない。数値目標達成のために子どもと教師を操作・管理することが「科学」としての英語教育学とみなされているようにも思えるからである。— そもそも従来型の「英語教育学の権威筋」は、私のこのような批判的文章をどう扱うのだろうか。「これは学術的言説（あるいは英語教育学）ではない」と排除するのだろうか。それならばその根拠は何で、その根拠の妥当性はどのように説明されるのだろうか。一般に「A は X であるが、B は X とは言えない」などと区別をする者は、区別対象（A や B）の観察（＝一次観察）に傾注するあまり、区別そのものの観察（＝二次観察）をおろそかにしがちである。私は今、従来の「英語教育学」に対する二次観察を推奨している—。

英語教育学は、数量に還元しがたい「こころ」と「からだ」のメッセージを、ここ最近制度化したに過ぎない研究方法論で構造的に否定していないだろうか（端的な例は浅薄な「客観主義」に絡め取られてしまった量的研究しか認めない頑迷な態度である（柳瀬 予定））。

英語教育学は、制度的権力者、そしてそれらの制度的権力者に連なろうとする者の権力の維持と強化の道具となっていないだろうか。英語教育学は子どもと教師の「からだ」と「こころ」を十分にとらえているだろうか。Foucault (1980) も言うように、学術的言説は「真理の体制」として君臨することにより、それから外れる人々や事象を抑圧する道具となる。現在主流の「英語教育学」は「からだ」と「こころ」を抑圧する言説権力となっていないだろうか。

今回のシンポジウムでは、私のこういった問題意識のもと、二名の発表者と一名の指定討論者を招いた。コーディネーターの私と二名の発表者の計三名で発表（一人 20 分）をした後に、15 分程度指定討論者がその三名と討議し、次に 15 分程度、会場全体で開かれた討論をすることを試みる（最後の 5 分は総括にあてる）。発表者の一名は、教師教育者として教師の「からだ」と「こころ」を観察する立場にある榎葉みつ子（広島大学）であり、もう一名は英語教育における「からだ」と「こころ」について先駆的な研究を行っている山本玲子（大阪国際大学）である。指定討論者としては全国英語教育学会会長として、大局的な立場からのリーダーシップが期待されている卯城祐司（筑波大学）を招いた。これら登壇者は、当然のことながら、種々の論点において、微妙にあるいは大きく意見を異にしているが、お互いにごまかしのない、真摯な議論を行うことに全員が同意している。

一人でも多くの英語教育関係者が来てくれることを望む。特に、制度と現実の間の葛藤を感じている方の参集を求めたい。そこで率直に意見が交わされ、英語教育についての新たな語り方が生まれることが、英語教育の希望だと考える。

#### 4. 引用文献

Damasio, A. (2010) *Self comes to mind: Constructing the conscious brain*. New York: Pantheon

Dewey, J. (1916/2004) *Democracy and education*. New York: Dover Publications

Foucault, M. (1980) *Power/Knowledge*. New York: Pantheon Books.

デヴィッド・ハーヴェイ（著）、渡辺治（監訳）、森田成也・木下ちがや・大屋定晴・中村好孝（翻訳）(2007)『新自由主義』東京：作品社

カール・グスタフ・ユング（著）松代洋一（訳）(1996)『現在と未来』東京：平凡社

柳瀬陽介 (2010) 「英語教育実践支援のためのエビデンスとナラティブ：EBM と NBM からの考察」中国地区英語教育学会研究紀要, 第 40 号, 11-20.

柳瀬陽介（近刊）「学習者と教師が主体性を取り戻すために」、柳瀬陽介・組田幸一郎・奥住桂（編著）『英語教師は楽しい。』東京：ひつじ書房 所収

柳瀬陽介（予定）『「客観性」を問い直し、量的研究の「客観主義」を乗り越える』、JACET 中部地区大会シンポジウム「第二言語習得論からみた大学英語教育 —量的アプローチと質的アプローチの共存—」（2014 年 6 月 7 日）発表資料

# 英語教育の担い手にとっての危機 —教育は人なり—

檜葉みつ子（広島大学）

キーワード：英語教育改革、教師、人材

## 1. はじめに

中学校教員としての経歴と、教員養成に従事する現在の立場から、筆者には学校現場との関わりが多い。月に数日程度の割合で、教育委員会や学校からの依頼を受けて、学校を訪れている。そのたびに実感されるのは、教師の仕事の加速する忙しさである。生徒指導上の課題や保護者への対応、説明責任のための書類作成など、教師の仕事は増えるばかりである。部活動や行事のために休日もなく、連日遅くまで職員室でパソコンに向かっているような、心身ともにゆとりのない教師にとって、英語教育に関する最近の様々な要請は、きっと違和感を覚えるものであるに違いない。

## 2. 「英語教育改革」と現場

最近の英語教育改革をめぐる動きの中から、教師に直接関係するものを挙げてみる。まず、平成 23 年に「外国語能力の向上に関する検討会」から出された「国際共通語としての英語力向上のための 5 つの提言と具体的な施策」である。平成 28 年度までの達成を目指す具体策の一つが「学習到達目標を CAN-DO リストの形で設定すること」であり、現在、中・高等学校には、学校ごとに CAN-DO リストを作成することが求められている。また、この時点で地域ごとに指定された拠点校には、英語教育改善への積極的な取り組みが求められた。

続いて平成 25 年に出された「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」には、「中・高等学校における指導体制強化」の内容として、「中・高等学校英語教育推進リーダーの養成」「中・高等学校英語科教員の指導力向上」「外部検定試験を活用し・県等ごとの教員の英語力の達成状況を定期的に検証」が盛り込まれている。これを受けて、平成 26 年度からは、自治体主催の研修が開催され、「英語教育強化地域拠点事業・教育課程特例校」においては、新たな英語教育が先取りで実施されている。

ここ数年の、このような「新たな英語教育」実現への動きは、本来は生徒や教師のためのはずであるが、実際に生徒や教師を育てることに結びついているのだろうか。

## 3. 人材を育てる

今津（2012）は、現職研修の重要性を説いて、「資質・能力向上は人的・予算的措置が無くても『教員個人の心がけ次第で実現できる』といった安易で精神主義的な思いこみ」が政策側にあることを指摘する。金谷（2012）には、専門家による継続的な支援によって成長した教師集団が、主体的に教育活動を展開した事例が紹介されている。その例には、意義あることであれば、外部からの要請ではあっても、それを契機とした英語教育の活性化が可能なことや教師への支援の重要性が示されている。大きな変革を担ってもらうからには、当事者である教師が活力に満ちて事に当たれるよう、人材として守り育てるという視点に立っての支援がいる。

## 4. 引用文献

今津孝次郎（2012）『教師が育つ条件』岩波新書

金谷憲（編著）（2012）『高校英語教科書を 2 度使う！山形スピークアウト方式』アルク

文部科学省（2013）「グローバル化に対応した英語教育改革実施計

画」[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/25/12/\\_icsFiles/afieldfile/2013/12/17/1342458\\_01\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/12/_icsFiles/afieldfile/2013/12/17/1342458_01_1.pdf)

文部科学省（2011）「『国際共通語としての英語力向上のための 5 つの提言と具体的施策』について」[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/082/houkoku/1308375.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/082/houkoku/1308375.htm)

# “英語教育の危機”に教育現場でできること —子どもに身体性を取り戻す—

山本玲子（大阪国際大学）

キーワード：身体性，コミュニケーション能力，同調

## 1. はじめに

近年の日本の英語教育は、「コミュニケーション能力育成」という耳触りのよい言葉に翻弄されてきたという実感がある。1989年、コミュニケーション能力が中学校・高校英語の学習指導要領で明確に打ち出されたことに始まり、2011年の小学校外国語活動の開始が拍車をかけた。コミュニケーション重視の方向に舵を切り、一種の昂揚感に包まれた英語教育現場で、小中学校の教員として20年間を過ごした筆者は、その成果と課題を目の当たりにしてきた。成果もなかったわけではないが、子どもの英語力がぐんと伸びた、という実感が現場ではまったくなかったのだ。あふれるような教材や、「英語は大切だ!」という大人たちの大合唱に取り囲まれた子どもたちを見ていると、20年前の子どもたちの方が学ぶ意欲にあふれていたとさえ思う。

PISAのアンケート結果が話題になるよりも先に、教育現場では子どもの変容に実感があつた。「与えられたことはこなすけれど、自らわくわくしながら学ぶ子どもが減った」、「日本語でさえ、教師の言葉に情動を動かさなくなった、感動しなくなった」という、これらの現場の教員の声は、一見英語教育とは関係ないように見える。しかし、学級担任や学年主任として子どもに接しダイレクトにそれらを感じてきた筆者は、こういった子どもの変化は、コミュニケーション能力を育てる科目である英語の授業での実感と重なりと断言できる。昔よりずっと複雑で多忙となった教育現場で起こっているのは、英語教育の危機だけではなく教育そのものの危機ではないか。逆に言えば、英語教育の復活は教育の復活に貢献するのではないか。そんな英語教師としての矜持を胸に、今叫ばれる英語教育の危機に、教育現場で何ができるのかを考えてみたい。

## 2. 子どもの「こころ」と「からだ」を動かす

日本人の英語力が世界の最底辺にある元凶を、昔ながらの文法中心の英語教育に求めようとする考えは根強い。文部科学省が2013年に発表した英語教育改革計画の内容がそれを反映したものであることは明らかである。しかし、この英語教育改革が謳っている授業、つまり英語で授業をし、会話を重視し、ディベートなどコミュニケーション活動を多彩に取り入れた授業を、まがりなりにも小中学校でめざしてきた経験から言えるのは、それらは「ないよりはあった方がいい」というレベルに過ぎないということである。英語力低下の原因は、コミュニケーション重視という名のもとに、身体に覚えさせることをせず、実践の場で役に立たない型通りの会話練習をしてきたことにある（大津、2004）。身体性という視点がないコミュニケーション重視の授業は空回りする危険性があるのだ。

「身体性」とは「からだ」の動きと、それが直結する「こころ」の動きであると、筆者は定義づけている。手が震えているから恐怖を感じるのか、恐怖を感じているから手が震えるのかを問うことが無意味であるように、「からだ」はすべての意味づけを行っており、我々は「からだ」を抜きにして他者とかわることはできない。人は「からだ」を通して他者と「こころ」の交流をするというメルロ・ポンティやダマシオの身体論はまさにそれである。

母語習得では、親も教師も自然に「からだ」を通して子どもとかかわり、同時に子どもと「こころ」の交流をしている。ところがなぜか英語教育になると身体性という概念がすっぽりと抜け落ち、ルールや語彙や型通りの表現を注入することだけが中心になってしまう。身体性という概念なしには、たとえば、「英語で授業」はなぜ望ましいのかの答えが出せない。リスニング力をつけるだけならCDを流しっぱなしにしてもいいはずだ。実際には、TVをずっと見せられていた幼児と、親と「からだ」と「こころ」の交流をしていた幼児（幼児は親

の動きを真似したり、親の発話に合わせてからだを動かしたりする)では、母語習得が著しいのは後者である。それと同じで、一方通行の「英語で授業」では意味がない。そのような定義づけがなされないまま「英語で授業」が独り歩きした場合、教師の一方的な発話をぼんやり聞いている中高生たち、という授業風景が予想される。理想的な「英語で授業」とは、教師の英語がたどたどしくても、少ない語彙であっても、子どもの「からだ」と「こころ」が教員の「からだ」と「こころ」に添っている授業である。筆者は、ほとんど英語を知らないはずの小学生相手の授業でそれを体験したことがある。単語をゆっくり並べただけの教師の発話やジェスチャーに子どもが呼応し、教師の伝えたい内容を全身で受け止め、呼吸のタイミングさえ一致するほどであった。まさに、それは子どもの「こころ」が、教師の「こころ」と交流できている状態である。またそのような教室では、子どもと教師の「波動」のようなものが互いに共鳴し増幅していく。教師として最高の幸福感を感じる瞬間である。そういう英語授業の中で子どもは、相手の「こころ」を理解する方法は英語でも日本語でも同じだと感じ、「からだ」で英語に浸るすべを身につけることができる。逆に、こちらがどんなに流暢な英語で授業をしても、どんなに子どもが行儀よく座っていたとしても、何かがちぐはぐで子どもの「からだ」がこちらのタイミングに合ってこず、「こころ」が動いてくれない時もある。どうにも居心地が悪く、気持ちが悪く、授業に「乗れ」ない、授業者本人だけが気づく感覚である。

身体の微細な動きが他者と合っていく状態、つまり身体的同調があって初めて他者との同調 (Synchrony) が生まれる。その同調が促進するのは、他者の情動を自らの情動として感じることで他者を真に理解する、認知的かつ言語的な能力である (Richardson *et al.*, 2012)。つまり、英語教師は、子どもに伝わる「からだ」と「こころ」の動きを自らが生み出せる身体性を身につけなければならないのである。英語に限らずあらゆる教科で言えることであろう。しかし、この身体性がもっともその威力を発揮する教科は、コミュニケーション能力を育てることを目標とする英語に他ならない。

繰り返される教育改革を批判しているのではない。筆者が教育現場にいた時代の総合的な学習の導入やコミュニケーション重視の方向性は、理念としては正しいものであったと確信している。しかし、新しいことを始めるには、現場の教師は忙しすぎる。成果をすぐに求められる世間の風潮もある。総合的に広く深く思考させるためにどんな授業をすればよいか、とじっくり腰を落ち着けて総合的な学習を考える時間はない。とりあえずポートフォリオを作り、校外で体験学習をさせ、壁新聞を作らせてと、自転車操業の悪循環に入ってしまう。本来ならやりがいがあるはずの総合的な学習であっても、強制されている感を教師が持つようになると、それは必ず子どもにも伝わる。今回の英語教育改革も、英語で行う良い授業とは何か、ディベートを通して何を学ばせたいか、などをじっくり考える時間はなく、とりあえず追い立てられるように形だけ整えておこうとする先生が続出しないか、同じことが起こらないかと、危惧するのである。

小学校英語も同様である。教科化が決まると、真面目な先生ほど過剰反応して、文字導入や文法説明などをすでにやり始めているのを見聞きすると、不安になる。もっとも身体感覚が豊かで、外国語でさえ教師の「からだ」と「こころ」に添うことのできる柔軟さを持っている小学生段階で、身体性を無視した授業がまかり通り、そのうち当たり前になってしまうのだろうか。

日本の英語教育は身体性を重視するべきであるという主張は、多忙な、誠実な英語教師への福音ともなると考えている。英語を通して子どもの「からだ」と「こころ」を動かすこと、そして教室に同調を生み出すこと、これらは簡単なことではないが、教師にとっては自分の感覚だけで勝負できる上に、この仕事の醍醐味を味わえる魅力的な目標のはずである。その目標に向かって努力した結果は間違いなく、成功した「英語で授業」やディベートや、内容あるコミュニケーション活動に直結する。

身体性を育てる英語の授業やそれが生み出す同調とは、具体的にどういうことだろうか、という疑問を持つ方もおられるだろう。筆者は、小中学生の英語授業において、TPR (Total Physical Response)、リズム指導、情動的な内容を使ったオーラル・インタープリテーション

などの活動を重点的に行い、以下のような方法で子どもの「からだ」と「こころ」の反応を調査した（山本、2013）。

(1) 子どもの可視的な身体運動の頻度を撮影映像から数値化

(2) 子どもの感想文を KJ 法などから分析

(3) 子どもの自覚する身体反応（発汗、動悸など）を質問紙調査から数値化

(4) 身体性を重視した授業を受けたグループとそうでないグループを、英語力向上で比較  
これらの研究の結果、子どもの「からだ」が教師のリズムに添っていくプロセスと、それが英語力向上に効果があることが明らかになった。また、教師の与えるインプットに対し、子どもの「こころ」が情動的に大きく豊かに反応することが、一体感と言ってもよい同調を教室に生み出していることは、確信に変わった。

しかし、低次な「からだ」の動きから、高次な「こころ」の動きへと研究対象がシフトするにつれ、調査方法の限界が明らかになってきた。教師と子どもが呼吸のタイミングまで一致するほどの同調を感じられた授業の際も、撮影映像では逆に可視的な動きは減少した。筆者はかなり独創的な方法で研究してきたつもりであるが、これが身体性研究の限界なのかもしれない。しかしここでやめるわけにはいかなかった。というのも、身体性を重視した英語授業を提案しても、同じ方法でやったのに子どもが乗ってこない、といった声を現場の先生から聞くことがあるからである。うちは荒れた学校だからどうせ無理、との声もある。指導内容を超えたところで、学習者の心身に伝わる「波動」を自らが生み出せる教師の身体性が必要なのだ。本当に追究すべきはここから先であった。

### 3. 今後の研究

そんな身体性研究に新しいフェーズを与えてくれたのが、脳科学研究の目覚ましい進展である。相手の動きを模倣することで相手の気持ちを自分のこととして感じることができるのは、脳内のミラーニューロンの働きである。たとえ可視的な身体反応がなくても、同じ筋肉運動をつかさどる部位が脳内で反応する仮想的な身体反応を確認することが可能になっている。「からだ」と「こころ」が一体であることが、科学的知見により解明されつつあるのだ。

2014年4月より、筆者は、東北大学加齢医学研究所川島隆太教授研究室の協力のもと、「外国語学習における学習者と教員の共振動化を実現する空間創出のための方法論の研究」と題する共同研究（共同研究者：京都外国語短期大学キャリア英語科石川保茂先生、東北大学加齢医学研究所スマート・エイジング国際共同研究センター野澤孝之先生、同研究所脳機能開発分野鄭嬌婷先生）を開始した。これまで、個人と個人の可視的・不可視的な同調を脳内反応より確認することは可能であったが、同研究所では、3名から20名という複数の人間の身体的同調を同定できる超小型近赤外分光測定装置の実用化に成功した。まさに教室内の神秘を解き明かせる時代がやってきた感がある。超小型近赤外分光測定装置による量的研究に加え、インタビュー、質問紙調査、授業録画映像を分析するというこれまでの蓄積を生かした質的研究を融合させた研究を展開する予定である。英語教育学におけるこの研究の意義を、脳科学の最先端におられる研究者の先生方が認めてくれたことが、何よりの僥倖であると感じている。また、研究協力校が得難い現状の中で、教師の本質に立ち入る「こころ」の研究に協力してくれる学校に出会えたことにも感謝したい。手前味噌で恐縮だが、現場とアカデミズムの幸福な結婚、英語教育学と脳科学という異なる分野の幸福な結婚となりえるのではないだろうか。

本共同研究の概要を、研究協力校教諭に伝えた時の反応は今でも忘れない。『同調が起こる授業…。それなら、困難校にいた時の方が何度もありましたね（笑）。』これが熟達した教師の真骨頂であろう。身体的共感を軽視し、言葉だけで表面的な共感や学習意欲喚起を強いようとしている教師が現実にはいる。熟達した教師は、同調が教育に果たす役割を認識しているわけではなく経験知として知っているだけかも知れないが、本気で自らの心身を開き子どもにぶつかっていく中で、間の取り方、発話のタイミング、ジェスチャー、すべてを子どもとぴったり合わせていく。それにより発生した身体的同調が「こころ」の同調へつながっていく。経験知や個人的資質という言葉でこれまで片づけられてきた「教育力」を切り取る、



という前人未到の領域へ、筆者はまたも踏み込んでいくことになりそうだ。なかなか子どもとの信頼関係を作れない未熟な教師でも効果的な英語教育ができる日が来ると確信している。そして何より、子どもと「からだ」と「こころ」を添わせた、同調の起こる英語の授業を通して、教師自らが、英語を使うこと、英語でこころを通わせること、英語を学ぶことを喜びと感じる「波動」を生み出し、それが子ども自身の「波動」となるかも知れない。

子どもが目を輝かせて英語を学ぶ教室の実現—それが、筆者のシンプルな夢である。なぜなら、学びの主人公は子どもだからである。日本が今置かれている英語教育狂騒曲の中では、誰が主人公であるかが忘れ去られがちである。先生方は、口で英語の大切さを説くのではなく、自らの「波動」で子どもを変えて欲しい。またその力が教室という場に存在することを信じて欲しい。

#### 4. 引用文献

Richardson, M. J., Garcia, R. L., Frank, T. D., Gergor, M., & Marsh, K. L. (2012). Measuring group synchrony: A cluster-phase method for analyzing multivariate movement time-series. *Frontiers in Physiology*, 405(3), 1-10.

大津由紀雄 (2004) 『小学校での英語教育は必要か』 東京：慶応義塾大学出版会.

山本玲子 (2013) 『子どもの心とからだを動かす英語の授業』 神奈川：青山社.

# 「英語教育の危機」は教室にあり

卯城祐司（筑波大学）

キーワード：英語の授業は英語で、英語教育改革実施計画、小学校外国語活動

## 1. はじめに

2011年度に小学校、2012年度には中学校で新学習指導要領が全面実施され、2013年度より高等学校でも年次進行で実施されている。高等学校では、「(英語の)授業は英語で行うことを基本とする」ことになった。果たして、現場はどう変わっているのだろうか。また、2013年6月に政府が「第2期教育振興基本計画」を閣議決定し、「小学校における英語教育実施学年の早期化、指導時間増、教科化、指導体制の在り方等や、中学校における英語による英語授業の実施について検討を開始」との方針が示され、同年12月に文部科学省は、この政府方針を具体化した「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を発表した。

英語教育に携わる者の1人として、国が英語教育の充実に向けて「本気で」検討を進めていることには、心から謝意を示したい。しかし、このような改革を進めるにあたっては、クラスサイズの改善、部活動や校務分掌等の精選、授業準備時間の確保などの整備が必要である。現場である教室を十分見つめずに、単に民間企業的な発想で、政治主導の見切り発車とならないような万全の準備を求めたい。

一方、「英語教育の危機」を叫ぶ声には「風が吹いたら桶屋が儲かる」的な論調も多い。しっかりと教育現場を学んでから、当を得た発言をしなければ、単に現場の不安をかきたてるだけである。また、このような声が英語教育の関係者以外から発信されることが多いのも残念である。これまで教育現場や学会等で蓄積してきたはずの実践や研究の成果を今こそ、示すべきではないのか。

## 2. 英語で進める英語を読まない授業

「直読直解」や「大意把握」などの言葉は英文読解指導を語る際、ずっと昔から取り上げられてきた。英語の授業を英語で進めること、そして進学指導から逃げずに内容のある英語と対峙し、バランス良く4技能に満ちた授業を進めることは、我々英語教師の悲願でもあった。しかし、ややお尻をたたかれての感がある「英語の授業は英語で」は、どうであろうか。

私が違和感を持つのは、日本語でやってもつまらない授業を「英語で」進めている授業だ。確かに、先生の指示や説明は英語でなされているけれど、授業の中で生徒は全く動いていない。そのような授業を進めている先生方からは必ず、次のような問いがある。「英語で授業をすると、これまでやっていたことが全て出来ない」あるいは「指導書の内容を全部教えようとすると、英語で進める授業には限界がある」といったものである。なるほどそうだろう。「英語で進める授業」は、これまで行ってきた「日本語で英語を解説している授業」とは全く異なるはずだ。従来の授業を単に英語に直すという発想では「英語で進める授業」は出来っこない。また、指導書に書かれている内容を全て教える必要もない。そんなつまらないことをするならば、指導書をコピーして配った方がまだましだ。

最もつまらない授業は、「生徒に真の英語力をつける」という最終目標もなく、ただ「英語で授業をすること」だけが目的の授業だ。英語に流ちょうな先生の「おしゃべり授業」は今なお多く見られる。英語を読む前にとうとうと内容を語り、生徒が初見で英語を読む機会を奪っている授業もその典型だ。先生が生徒の英語力や双方向性を考慮していないため、その先生の英語が生徒に伝わらず、その後も英文を新鮮に読めることだけが不幸中の幸いである。

また、生徒が英語で理解し活動するのを助けるためではなく、先生が英語で授業を進めやすくするために、ワークシートを多用している例も多く見られる。先生の指示は英語だけれど、生徒が下を向き黙々と作業をしている授業だ。ペアワークにしても、プリントに書き込んだ英語をただぼそぼそと読み上げ、相手の顔を一度も見ないような活動が行われている。

教室の中にいるのは必ずしも英語が得意な生徒ばかりではない。日本語で細部ばかりを突っつく「100%の理解を求める授業」では、多くの生徒が置いてきぼりになる。一方、大意把握の「英語で英語を読む授業」では、どんな生徒も参加できる。その大意が80%の者もいれば、50%の者もいるだろう。しかし、それぞれが、「どんな場面か」、「登場人物は」、「何が起きているのか」くらいはつかめるような活動はできる。このような授業で、一人でも多くの生徒が生きるはずである。

### 3. 小学校における英語教育改革

全国の高等学校は4,981校、中学校は10,628校であるのに対して、小学校は21,131校であり、また、そのうち20,836校が公立学校である（文部科学省『平成25年度学校基本調査』による）。これほど多い小学校で外国語（英語）を教科として教えるためには、例えば、担当できる教員の養成・研修のために莫大な予算と人員が必要である。まして、小学校では音声指導が中心になるが、これには高度な訓練が必要である。

このように、小学校における英語教育の改善には、クラスサイズ、小学校・中学校（英語）・高等学校（英語）免許の問題、教員養成、担当教員への研修、財政措置、指導（特に文字の扱い方等）など様々な課題や要因が絡んでいる。これらの要因を切り離し、万全の準備なしに見切り発車しては、児童の英語力の二極化や英語嫌いを増加させることにもなりかねない。

また、教科化により、中学校英語のスキル指導的な部分のみが前倒しになることが懸念される。すなわち、言語材料や技能習得の到達目標が明示されることにより、結局明示しやすいものだけが盛り込まれ、これまで目指し実践してきたコミュニケーション能力の育成という視点が見失われる可能性がある。担当教員自身が受けてきた旧来型の中学校英語の前倒しとしてはならない。そもそも小学校に英語の時間が導入された目的のひとつは、英語を知識として学び実際に使う場面もない中高の英語授業も含めて改善することであったはずだ。

### 4. おわりに

小中高大そして生涯教育を通して、英語を学び使い続けるような学習者を育てるためにも、実際に外国語を用いてコミュニケーションを体験するような機会を充実させることは必要である。私は3校12年間と北海道で公立高校の教員を経験したが、2校目に赴任した離島の困難校では、英語を学ぶ必然性を探し求めて試行錯誤した。受験に英語が必要な生徒の多くは島外の高校に進学しており、生徒たちの両親の多くが漁業を営み、島の中には教室以外に英語がなかったからである。外国語として学ぶ日本では、このように「なんで英語やるの」と思っている児童・生徒は、まだまだ多いのではないだろうか。

また、忘れられがちな、特別支援を必要とする児童、外国籍の児童への配慮・補完措置についても常に視野に入れておきたい。個人的には週に1日、筑波技術大学で耳が不自由な学生たちに英語を教えているが、彼らにはもっと多くの支援が必要である。

現在、各学校ではCan-Doリストの作成が行われ、外部テスト等による数値目標の設定も求められている。しかし、目標を決めれば生徒の英語力がそこに到達するものではない。また、数値目標に達しないのは必ずしも先生の教え方が悪いからでもない。勉強は、やったからと言って必ずしも等しく成果が出るわけではない。教室の生徒全員が最終的に英検1級をとるのは無理かもしれないが、全員が今よりも少しでも英語を好きになること、そのような授業を目指すことは可能である。小学校で英語と存分に向かい合い、英語で遊んだ子どもたちは、きっと小中高大そして生涯教育を通して、英語を学び、また使い続けるであろう。そして、中高大のどんな英語力の生徒も、それぞれの力に応じて英文と格闘する、そのことによって、少なくとも、今どのような内容の英文を、何故読んでいるのか、それがいつも鮮明となる。そのような授業を「英語で英語を読む」授業で目指していきたい。

### 5. 引用文献

- 卯城祐司（2013）「英語で進める英語を読まない授業」『語研ジャーナル』、第12号、65-70。  
卯城祐司（2014）「英語を使う意欲あふれる子どもたち」を育てるために『時報 市町村教委』、第250号、2-4。

# 自由研究発表および講話・ワークショップ

14 : 50 ~ 17 : 05

## 教養講義室棟 1号館

時間	第1室 102	第2室 201	第3室 202	第4室 301	第5室 302
14:50   15:20	【講話・ワークショップ】 ICT、英語の授業 でどう使う？ —授業改善のため の ICT 活用事例—	【講話・ワークショップ】 どの子にも存在感 があり自尊心 の高まる授業 を目指して —協調的問題解 決と特別支援教 育の視点から—			【講話・ワークショップ】 そうだったの か！ ひろしま 型カリキュラム と小学校英語科 —創設の経緯か ら研修の実際ま で—
15:25   15:55				英語母語話者と 日本語母語話者 の身体感覚の違 い —バドミントン を例に—	
	渡部 正嗣	宇城 明		坂井 峻也	堂鼻 康晴
16:00   16:30	協同学習の技法 を導入したアク ティブ・ラーニ ング型授業の実 践	CLIL を通じての 試み① —CBI から CLIL へ—	英語学習におけ る嫌悪感と学習 価値が動機づけ と学習の伸びに 及ぼす影響	意味分類に基づ く日本人学習者 の動詞運用：母 語転移との関係	小学校および中 学校で養われる コミュニケーション 能力とは —鳥取市でのア ンケート調査の 結果から—
	土屋 麻衣子	中外 俊宏	藤居 真路	井上 聡	竹内 ひとみ
16:35   17:05	英語力の相互認 識が学習者のパ ワー関係に与え る影響	CLIL and Cross- curricular English Instruction for Elementary School Children	英語授業レベル の動機づけが低 い学習者の内発 的動機づけを高 める授業の効 果：予備的検討	英語多義動詞の 意味拡張に関す る考察 —文法化・イデ ィオム化・構文 化の視点から—	公立小学校が取 り組む、外国語・ 英語活動の授業 づくり
	山口 健人	二五 義博	田中 博晃	井口 智彰	渡部 靖徳

教養講義室棟 2 号館

時間	第 6 室 4 0 1	第 7 室 4 0 2	第 8 室 4 0 3	第 9 室 4 0 5
14:50   15:20				
15:25   15:55	難易度の高い教材を使用したリスニング授業によるリスニング不安の変容  山内 優佳	朗読における沈黙の修辭的効果 —英語母語話者と日本人英語学習者の Eloquent Silence の使用傾向—  二川 敬伍	内容言語統合型学習に位置づける持続可能な教育について —発表能力伸長を支援する指導法—  吉川 正美	多肢選択式試験の選択肢情報が解答に与える影響 —選択肢だけでセンター試験は解けるのか—  吉川 良太
16:00   16:30	Effects of shadowing on acquisition of L2 collocations  住岡 紀彦	読むことと書くことを統合させた活動における学習行動の分析  浅井 智雄	ポーズを利用したりリーディング練習と逐次通訳練習の効果の比較  竹野 純一郎	Exploring teacher responses to students' questions: From description to pedagogy  Ian Nakamura
16:35   17:05	英語リーディング授業における批判的読解力育成のための評価発問の検討 —高等学校英語教科書の分析を通して—  福本 拓真	Effects of task repetition on language use and learning: Incorporation, fluency, and complexity  中村 英子	学習者の習熟度に応じた多読活動に関する一考察  大森 誠	どの文法項目が中学生の英語力を左右するのか？ —中学校英語検定教科書の基本本文の分析から考える—  安木 真一

第1室（教養講義室棟1号館1階 102）

発表時間	発表タイトル・所属・お名前	発表要旨
14:50～ 15:20	ICT、英語の授業でどう使う？ —授業改善のためのICT活用事例—	ICT活用の有効性は疑う余地もないが、一部の教員の特別な指導技術と見なされる傾向は未だ否めない。機器をどう使うかではなく、授業をどう改善するかという見地に立ってICTと向き合おうとする意識や姿勢が重要である。
15:25～ 15:55	島根県教育庁教育指導課 指導主事 渡部 正嗣	
16:00～ 16:30	協同学習の技法を導入したアクティブ・ラーニング型授業の実践  福岡工業大学 土屋 麻衣子	英語力と意欲の低い大学生学習者のディモチベーション要因を軽減させることを意図し、協同学習の1技法と、アクティブ・ラーニングの質を高める装置として、溝上（2013）において提唱されている4つの仕掛けを導入したアクティブ・ラーニング型の授業を、3クラスにおいて1年間実施した。本発表では、その実施方法と結果について報告する。
16:35～ 17:05	英語力の相互認識が学習者のパワー関係に与える影響  広島大学大学院 山口 健人	本研究の目的は、学習者同士の英語力の相互認識がペアワーク時のパワー関係に与える影響を明らかにすることである。英語力に差のある初対面の学習者を実験協力者に選定した。互いの英語力に関する情報の公開前後でペアライティング課題と面接を実施し、各学習者の発言を分析したところ、両者のパワー関係に変化が見られた。

第2室（教養講義室棟1号館2階 201）

発表時間	発表タイトル・所属・お名前	発表要旨
14:50～ 15:20	どの子にも存在感があり自尊感情の高まる授業を目指して —協調的問題解決と特別支援教育の視点から—	「仲間との価値ある体験」「できたという達成感」などが生徒の自尊感情を高めます。そのような体験をたくさん積ませてあげたい。そんな授業を目指しています。ワークショップではCoREF推奨の知識構成型ジグソー法を中心に、全員参加を目指した工夫を紹介します。
15:25～ 15:55	米子市立美保中学校 宇城 明	
16:00～ 16:30	CLILを通じての試み① —CBIからCLILへ—  広島国泰寺高等学校 中舛 俊宏	Content and Language Integrated Learning (CLIL) という教育法が急速に広まっている。これは、教科内容を題材にさまざまな言語活動を行うことで、日本の生徒のコミュニケーション能力を高めることが期待できる。日本におけるContent-based Instruction (CBI) の実践を振り返り、より体系化された指導であるCLILの可能性を探っていく。

16:35～ 17:05	CLIL and Cross-curricular English Instruction for Elementary School Children  海上保安大学校 二五 義博	CLIL has become increasingly important both in Europe and Japan. This presentation intends to clarify how CLIL practices involving science, arithmetic and social studies are effective for upper grade Japanese pupils in terms of language skills, subject content, thinking and cooperative learning.
-----------------	--	--

### 第3室（教養講義室棟1号館2階 202）

発表時間	発表タイトル・所属・お名前	発表要旨
14:50～ 15:20		
15:25～ 15:55		
16:00～ 16:30	英語学習における嫌悪感と学習価値が動機づけと学習の伸びに及ぼす影響  広島県立尾道商業高等学校 藤居 真路	本研究では、英語学習における嫌悪感や学習価値が、学習意欲や学習の伸びにどのような影響を与えており、その構造がどのようなになっているのか探求するために、高校1年生に質問紙調査を実施した。その結果について発表をする。
16:35～ 17:05	英語授業レベルの動機づけが低い学習者の内発的動機づけを高める授業の効果： 予備的検討  広島国際大学 田中 博晃	本論では日本人大学一年生の内、英語授業レベルの動機づけが低い学習者30名を対象に自己決定理論を用いた動機づけを高める授業実践を行い、その効果の予備的検討を行った。その結果、調査協力者の英語授業レベルの動機づけが顕著に上昇し、また3欲求、特性レベルの内発的動機づけ、英語授業への取り組みの上昇も見られた。

### 第4室（教養講義室棟1号館3階 301）

発表時間	発表タイトル・所属・お名前	発表要旨
14:50～ 15:20		
15:25～ 15:55	英語母語話者と日本語母語話者の身体感覚の違い —バドミントンを例に—  広島大学大学院 坂井 峻也	異文化理解において、英語母語話者と日本語母語話者の身体感覚がいかに異なるかという問題は、未解明の分野のひとつである。本研究では（1）上記の問題を調査し（2）身体感覚に影響を及ぼした文化的背景を考察する。なお、筆者が長年バドミントンに従事してきたことを鑑み、ここではバドミントンを例にとる。

16:00～ 16:30	意味分類に基づく日本人学習者の動詞運用： 母語転移との関係  環太平洋大学 井上 聡	本研究の目的は、意味分類 (Biber, 1999) に基づく学習者の動詞運用の検討である。コーパス分析を通して、課題が見られた動詞タイプ (心理、動作、使役、アスペクト) を提示し、母語転移の影響や今後の指導について議論を行う。
16:35～ 17:05	英語多義動詞の意味拡張に関する考察 —文法化・イディオム化・構文化の視点から—  大島商船高等専門学校・広島大学大学院 井口 智彰	一般に take, give, get 等の基本動詞は多義的であると言われている。これらの動詞は不変化詞と結びついて成句的な表現を形成することも多く、英語の非母語話者にとって必ずしも習得が容易ではない。本発表では、英語の多義動詞の意味拡張のメカニズムを文法化・イディオム化・構文化といった視点から記述・分析し、上記のような多義語の効果的な学習法について考察する。

### 第5室 (教養講義室棟1号館3階 302)

発表時間	発表タイトル・所属・お名前	発表要旨
14:50～ 15:20	そうだったのか！ ひろしま型カリキュラムと小学校英語科 —創設の経緯から研修の実際まで—	平成22年度、広島市立小・中学校で全面実施された独自の教育課程「ひろしま型カリキュラム」。本ワークショップでは、その象徴的教科である「小学校英語科」にフォーカスし、創設の経緯から教員研修まで演習を通して紹介したい。
15:25～ 15:55	広島市立広島商業高等学校・元広島市教育センター主任指導主事 (事) 主任 堂鼻 康晴	
16:00～ 16:30	小学校および中学校で養われるコミュニケーション能力とは —鳥取市でのアンケート調査の結果から—  鳥取環境大学・京都大学大学院 竹内 ひとみ	本研究は、鳥取市の小学校および中学校の教師へのアンケート調査の結果をもとに、小学校英語活動で養われるコミュニケーション能力とは何か、また小学校から中学校へのスムーズな移行が行われるためには何が大切かを考えたものである。小学校英語教育の改革が進む中で、「コミュニケーション能力の育成」という視点に立って英語教育における今後の課題を探る。
16:35～ 17:05	公立小学校が取り組む、外国語・英語活動の授業づくり  岩国市立米川小学校 渡部 靖徳	小学校英語をめぐる環境が大きく変わろうとしています。そのような中、本校では昨年度、全校で外国語活動・英語活動の授業づくりに取り組みました。小学校の先生の日線実践を振り返り、成果と今後の課題を考察しました。合わせて、この実践が小学校英語の今後の展開につながるようであれば望みとするところです。



第6室（教養講義室棟2号館1階 401）

発表時間	発表タイトル・所属・お名前	発表要旨
14:50～ 15:20		
15:25～ 15:55	難易度の高い教材を使用したリスニング授業によるリスニング不安の変容  広島大学大学院 山内 優佳	本研究の目的は、リスニング指導により学習者の不安がどのように変容するのかを明らかにすることである。調査対象者は大学1年生で、英語を苦手とする学習者がほとんどであった。自然な速さで話される英語のリスニングを取り入れた授業を実施した結果、「実生活におけるリスニング」に対する不安が軽減された。
16:00～ 16:30	Effects of shadowing on acquisition of L2 collocations  広島大学大学院 住岡 紀彦	本研究は、英語コロケーション聴解処理に及ぼすシャドーイング効果の検証を試みた。コロケーションの日英語間の意味の対応性の有り無し条件で、シャドーイング訓練がコロケーション聴解処理の速度と精度に与える効果を測定し、聴解処理レベルを考察した。
16:35～ 17:05	英語リーディング授業における批判的読解力育成のための評価発問の検討—高等学校英語教科書の分析を通して—  広島大学大学院 福本 拓真	本発表では、批判的読解力育成のための指導がなされているのかという問題意識から、先行研究を通して批判的読解力を定義し、評価発問が批判的読解力育成に寄与する可能性について述べた後、現行の高等学校教科書に掲載されている発問の実態を示すことで、英語リーディング授業において評価発問を使用する意義を検討する。

第7室（教養講義室棟2号館1階 402）

発表時間	発表タイトル・所属・お名前	発表要旨
14:50～ 15:20		
15:25～ 15:55	朗読における沈黙の修辭的效果—英語母語話者と日本人英語学習者の Eloquent Silence の使用傾向—  広島大学大学院 二川 敬伍	朗読やスピーチなどの効果を高める方法の一つに、修辭的な効果を持つ雄弁な沈黙（Eloquent Silence: ES）がある。本研究では、英語母語話者と日本人英語学習者の ES の用い方について、実験を基にまとめた。その結果、前者は強調箇所後に、後者はその前に ES を置く傾向があった。また、インタビューの結果から、両者の ES に対する認識には違いがあると分かった。

16:00～ 16:30	読むことと書くことを統合させた活動における学習行動の分析  広島県立廿日市西高等学校 浅井 智雄	読むことと書くことを統合させた活動は、学習過程の認知的負荷が大きいため、学習者が経験する機会が少なく、実証的に学習行動が解明されているとは言い難い。本研究では、相反する内容の英文を読んだ後、自分の考えを英語で書かせた。データ分析の結果、書く前に読むことは、書くことを意識的側面からも促進させること、英文の量の差により学習者の認知構造に差が見られる傾向があることが判明した。
16:35～ 17:05	Effects of task repetition on language use and learning: Incorporation, fluency, and complexity  Lancaster University 中村 英子	This presentation explores the relationship between the process and production of language learning. The process of the learners' language development of fluency and complexity revealed their different approaches to linguistic incorporation. The 15 students' fluency and complexity development through five task iterations were underpinned by individual differences in linguistic incorporation.

### 第8室（教養講義室棟2号館1階 403）

発表時間	発表タイトル・所属・お名前	発表要旨
14:50～ 15:20		
15:25～ 15:55	内容言語統合型学習に位置づける持続可能な教育について —発表能力伸長を支援する指導法—  吉川 正美	本研究では、発表能力伸長に対して効果的な指導法を探究する。専門・職業的な発表能力に対して特徴のある説明関係を示したのは高次読解力である。言語運用に必要な認知の熟達に貢献する学習法である CLIL と ESD の関係を明確にする。その理論的な枠組において複数技能統合型の教育実践事例を分類し指導法の可能性や有効性を検討する。
16:00～ 16:30	ポーズを利用したリピーティング練習と逐次通訳練習の効果の比較  中国短期大学 竹野 純一郎	まとまりのある音声間のポーズを利用したリピーティング練習と逐次通訳練習の効果の違いを検証する。リスニングの際に学習者は、英語学習の初期の段階では英語を日本語に変換して意味解釈をしていると考えられる。リピーティング練習、逐次の意味解釈の練習が聴解力にどのような影響を及ぼすのかを比較・検証する。

16:35~ 17:05	学習者の習熟度に応じた多読活動に関する一考察  松江工業高等専門学校 大森 誠	松江高専で平成23年度より実施している多読活動を事例として紹介し、学習者の習熟度レベル（特に英語を苦手とする学習者）に応じた多読活動の方法を今後考えていく目的として、これまでの多読実践やアンケートから得られたデータ（読書量、WPM、理解度、意欲）を分析し、その方法を探ろうとする実践研究発表です。
-----------------	--	--

### 第9室（教養講義室棟2号館1階 405）

発表時間	発表タイトル・所属・お名前	発表要旨
14:50~ 15:20		
15:25~ 15:55	多肢選択式試験の選択肢情報が解答に与える影響 —選択肢だけでセンター試験は解けるのか—  広島大学大学院 吉川 良太	本研究は、多肢選択式試験の選択肢に含まれる情報が解答選択に与える影響を明らかにする。実験方法として、実際のセンター試験過去問から選択肢だけを抜粋した情報を基に、つまり、まったく問題文を読ませないままに、被験者に解答させる。これらの結果から、多肢選択式試験で選択肢を構成する際に、独特の方略の影響を減らすための示唆ができる。
16:00~ 16:30	Exploring teacher responses to students' questions: From description to pedagogy  岡山大学 Ian Nakamura	Investigating a teacher's own talk with students by recording, transcribing, and analyzing it has been long advocated for professional development. This 'small-scale investigation' into a teacher's discourse practice examines his discussions with students. Through systematic self-inquiry, a practitioner-researcher's routine discourse can be transformed into revitalized informed practice.
16:35~ 17:05	どの文法項目が中学生の英語力を左右するのか？ —中学校英語検定教科書の基本本文の分析から考える—  津山工業高等専門学校 安木 真一	中学校の検定教科書ではセクション毎に新出の基本本文が導入される。「中学英語の基礎基本は何か？」と問うたときに、基本本文の再生や並び換えができる力をあげる事もある（安木 2008）。この基本本文の文法項目の中でどれが英語の得意な生徒と苦手な生徒を分けるのであろうか。本発表は文法項目毎に分類した基本本文の並び換えを中学卒業直後の生徒に課し、それを様々な角度から分析する。

第 45 回中国地区英語教育学会 島根大会プログラム

発 行 日 : 2014 年 6 月 16 日

発 行 : 第 45 回中国地区英語教育学会 島根大会実行委員会

代 表 者 : 大会実行委員長 飯島 睦美  
大会事務局長 猫田 英伸

編 集 : 第 45 回中国地区英語教育学会 島根大会事務局  
大谷 みどり、大森 誠、猫田 英伸 (50 音順)

〒690-8504 島根県松江市西川津町 1060  
島根大学教育学部 猫田 英伸 研究室内

印刷・製本 : さんきゅう印刷株式会社

〒690-0021 島根県松江市矢田町 215-1



